

ギフチョウ生息地保全をめざした絵下山頂整備に関する市民意識

浅野 敏久*

1. はじめに

(1) 調査の背景と目的

全国的な地上波デジタル放送への移行にあわせ、各地でテレビ塔の建設等が進んでいる。広島県でも2006年の開局を目指して整備が行われており、広島市南西部、呉市境近くにある絵下山^{えげざん}において、新たなテレビ塔が建設されつつある。絵下山頂には、これまでも2本のテレビ塔が設けられており、これまでもテレビ塔のある山として知られてきた。絵下山頂付近は、テレビ塔が立ち、展望広場等が整備され、多くの人々が訪れる場所である一方、「春の女神」とも言われるアゲハチョウ科の蝶、ギフチョウの生息地でもある。テレビ塔建設に際して、その生息環境への影響について配慮され、食草の移植などの試みもなされている。今後の古いテレビ塔の撤去などにより跡地整備のあり方が課題となり、そこでギフチョウの生息環境に配慮した公園整備を図ることが選択肢の大きな1つとなっている。なお、当地は、広島市の都市計画において、都市公園として指定されており、公園的な利用が前提となる。

ギフチョウは、広島県では一部を除き広く確認されているが、レッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類に指定されており、その保護の必要性は高い。ただし、ギフチョウは天然自然の環境というより、人手の入ったいわゆる里山的環境に生息しており、テレビ塔跡地の公園整備で、「ギフチョウとの共存」を一つの方向として目指すならば、人々の日常生活が結果として里山環境をつくりだしたかつてのような状況を期待できない現在において、いかにしてその場所で里山的環境を創出し、維持するのが課題となる。近年、各地で市民ボ

ランティア等による里山整備が行われており、今後の絵下山の整備に際しても、市民・住民による環境管理が可能であるかどうか、そしてそれが「ギフチョウとの共存」をテーマとした公園整備につながるのかどうかを検討することが望まれる。

本研究は、平成16年度後期広島大学特定課題プロジェクトのひとつに、広島市からの要請を受けた「絵下山公園をモデルにした新しい都市公園づくり」が採択されたことから始まり、共同研究である当該プロジェクトの一部として、絵下山で市民参加による環境管理が実現可能かどうかを検討すべく、近隣住民と森林ボランティアへの関心の高い市民を対象とするアンケート調査を行ったものである。

また、成果の公表について、絵下山をはじめとする瀬戸内の都市後背地の里山整備・里山景観の現状を知る一つの状況報告になると考え、瀬戸内傾斜地のくらしと景観をテーマとする本誌において行うこととした。

(2) 目的と方法

アンケート調査は2種類行った。一つは、絵下山の山麓にすむ近隣住民を対象としたもので、里山など身近な環境への関心や、ボランティア活動への参加意識、絵下山山頂整備への意見等を質問した。もう一つは、広島市内やその周辺在住者で里山ボランティア活動に関心のありそうな人を対象として、里山活動への参加実態やギフチョウとの共存を目指した公園整備に関する意見等を尋ねたものである。里山ボランティア活動に関心のありそうな人を抽出するのは、厳密には困難であるが、広島市農林業振興セン

*広島大学総合科学部広域文化研究講座

ター森林整備課の協力を得て、これまでに市が実施してきた過去の森林ボランティア養成講座受講生を対象とすることができた。なお、今回の調査は、全市域的にランダムなサンプリングではなく、近隣住民と里山ボランティアへの関心層に焦点を絞ったアンケートである。実際の公園整備を構想していくためには、将来の参加が期待される層を対象にした方が、現実味が得られるからである。以下、前者を絵下山周辺住民アンケートとし、後者を森林ボランティア養成講座受講者アンケートと呼ぶ。

絵下山周辺住民アンケートでは、住宅地図をもとに絵下山麓にある住宅団地に500通のアンケートを配布した。絵下山には地形的条件から、北西麓と南東麓に住宅地が団地状に開発されている。北西方面では、神長日広団地で75通、矢野ニュータウンで175通、南東方面では、寺屋敷・五月台団地で100通（ここまでは広島市安芸区）、焼山泉ヶ丘団地（呉市）で150通のアンケート用紙を、2004年10月30・31日の2日間で各戸に配布し、郵送での返送を依頼した（11月30日まで回収）。配布する家の選択については、地図上でできるだけランダムになるように配慮した。回収数は、154通で回収率は30.8%であった。

森林ボランティア養成講座受講者アンケートでは、市に発送を依頼し、過去の受講者全員にアンケート用紙を送付した。広島市の行っている森林ボランティア養成講座は、1996年度より市民参加の森づくり事業として行われているもので、講座修了生の多くが「もりメイト倶楽部 Hiroshima」

という森林ボランティア団体に入会し、広島市内等の山林保全活動に関わっている。行政が行う講座と市民活動とが、うまくリンクしている事例であり、広島市を代表する市民参加型里山保全活動のひとつである。なお、264通のアンケートを発送したが、39通の宛先不明があったので、実質225名を対象としたことになる。実施時期は2005年3月31日から4月25日までで、回収数は106通で回収率は47.1%であった。

2. 絵下山周辺住民アンケート調査の結果

(1) 対象者の属性

性別は、男性50.6%、女性48.1%（無回答があるため合計が100%にならないことがある。以下同様）である。年齢層としては、かなり高く、40歳以上60歳未満が48.7%、60歳以上が40.9%と大半を占め、20歳以上40歳未満が8.4%、20歳未満が1.3%であった。関連して、回答者の現住地での居住歴も長く、20年以上が57.8%、10年以上20年未満が20.1%、10年未満は20.1%であった。また、呉市在住者が、約3割でアンケートの配布割合とほぼ一致した。

(2) 絵下山の利用状況

回答者の居住歴は概ね長いので絵下山に馴染みはあると予想されるが、実際の利用状況がどうか尋ねた。主な利用目的（複数回答：図1）は、散歩・ハイキング等がもっとも多く、半数以上が経験している。2位以下の項目は割合が低くなるが、

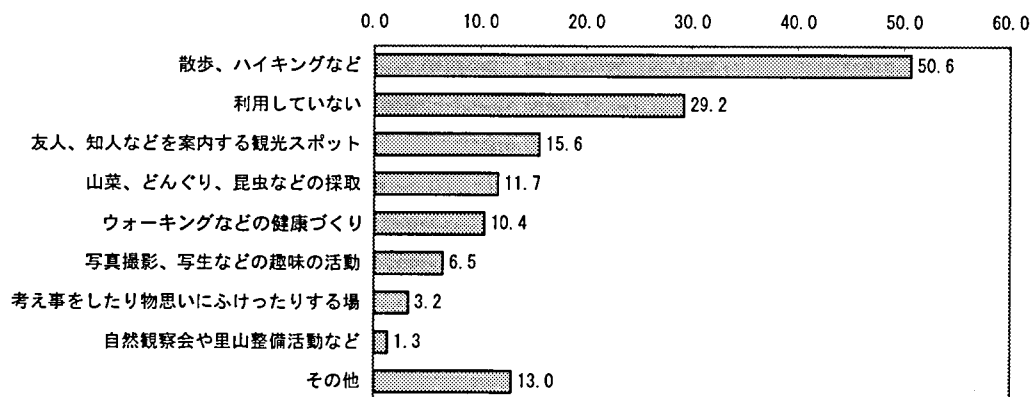


図1 絵下山の利用状況（周辺住民、複数回答、%）

友人・知人を案内する観光スポット（15.6%）、山菜やドングリ、昆虫などの採集（11.7%）、ジョギング・ウォーキング等の健康づくり（10.4%）が比較的多く選択された。一方で、利用していないが29.2%もあり、山麓に住んでいるものの山とは無縁の人も多い。自然観察会や里山整備活動などはわずかに2名にすぎなかった。近隣住民にとって、絵下山は、ちょっと散歩する裏山といったところで、時には客を案内できる場所となっている。

絵下山に上る頻度は、これまで一度も登ったことのない人は5.8%にすぎず、大方の住民が1度は登っているが、その多くは過去に1,2回登った程度（めったに登らない）（37.7%）であり、2,3年に1度程度が22.7%でそれに次ぐ。一方、年に何回も登っている人が33.8%（うち月に複数回登る人が6.5%）であった。

山に登る季節としては、春が41.6%と最も多く、次いで秋が26.0%となり、夏冬の利用は少ない。季節は関係ないとした人は34.4%であった。絵下山で気に入っているものをあげてもらったところ（複数回答）、山頂からの景色が82.5%で群を抜いて高かった。実際に山頂から広島港を見下ろす景色はすばらしく納得できる数字である。次いで、散策路の環境が32.5%、生息している動植物が11.0%と山の環境そのものについて高い評価が与えられている。その他、山そのものという答えが17.5%で、テレビ塔という答えも5.2%あった。

(3) 環境観、ならびにギフチョウの認識

対象者の環境への関心を尋ねるために2つの質問を行った。一つは身近な環境への関心の程度で、もう一つが環境と経済のいずれを重視するかというものである。前者については、関心

はあるが特にアクションを起こしていない人が、63.6%と大半を占めている。身近な環境への関心のない人も、あまりない・まったくないをあわせて11.7%に及んでいる。身近な環境について友人等と話をする人が13.0%、積極的に関わろうという意志のある人が11.0%であった。

後者については、環境保全と経済成長は別問題とする人が43.5%と最も多くなった。その他は、経済成長より環境保全に重きをおく回答の割合が高かった。全国的な傾向として指摘される環境意識の高まりを反映した結果ともいえる。ただし、前問に示されたように、関心はあるが、かといって何かをするという段階にないのが大方といえよう。

次に回答者の、ギフチョウに関する認識の程度（図2）であるが、56.5%の人がギフチョウをよく知らないと答えており、名前を知っている程度の32.5%を加えれば、研究者や愛好家の間ではギフチョウの生息地として知られたところであり、また、回答者の多くが絵下山に登る季節は春と答えているものの、多くの住民にとってはあまり馴染みのない存在といえる。

(4) 里山ボランティア活動への関心と参加意向

里山ボランティア活動への関心と参加意向を、一般的な活動と絵下山での活動に分けて尋ねた。活動については、間伐や下草刈りなどの山の手入れをする活動（里山管理）と公園のゴミ清掃などの美化活動（美化清掃）、自然観察会等の環境教育活動（環境教育）の3タイプに分けた。

里山一般での活動には、いずれのタイプも半分以上の回答者が関心あるとし、全く関心がない人

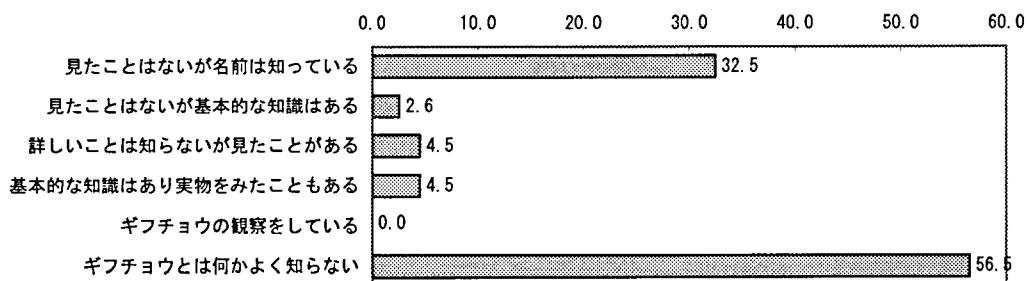


図2 ギフチョウの認知度（周辺住民、%）

表1 里山ボランティア活動への関心と参加意向（周辺住民・里山一般）

単位%

		里山管理	美化清掃	環境教育
関心の有無	おおいにある	14.9	25.3	14.3
	多少ある	40.3	50.6	44.2
	あまりない	33.8	17.5	28.6
	まったくない	5.8	1.9	7.8
	無回答	5.2	4.5	5.2
参加意志	ぜひ関わりたい	2.6	3.2	3.9
	機会があれば関わりたい	40.3	48.7	48.1
	必要なら関わらざるを得ない	37.0	33.8	26.0
	関わりたくない	13.0	7.1	15.6
	無回答	7.8	7.1	7.1

表2 里山ボランティア活動への関心と参加意向（周辺住民・絵下山）

単位%

		里山管理	美化清掃	環境教育
関心の有無	おおいにある	11.0	19.5	14.3
	多少ある	44.2	48.1	40.3
	あまりない	31.2	20.1	31.2
	まったくない	9.1	7.1	8.4
	無回答	5.2	5.2	5.8
参加意志	ぜひ関わりたい	1.3	3.9	7.1
	機会があれば関わりたい	40.9	41.6	38.3
	必要なら関わらざるを得ない	35.7	35.7	31.2
	関わりたくない	14.3	11.0	16.2
	無回答	7.8	7.8	7.8

はずかである（表1）。参加意向になると関心の場合より積極性が薄れ、必要なら関わらざるを得ないと答える人が、1/3前後になる。関わりたくない人は、関心が全くない人よりも多い。

活動タイプごとの違いをみると、美化清掃への関心の高さが目立つ。里山管理と環境教育が似た構成比になるのに対して、美化清掃では、関心が、大いにある、多少ある、のそれぞれの範疇で、10%ほど他（里山管理と環境教育）より高くなり、逆に関心のない人は半減する。一般論として尋ねた問いであっても、日常的な絵下山でのゴミ投棄への不快感や悩みが回答に反映されていると考えられる。しかし、参加意向では3タイプの差はあまり明確ではない。活動にぜひ関わりたいと答えた人は、いずれの場合もごく少数で、大方が、機会があれば関わりたいか、必要なら関わらざるを得ないを選択していた。

絵下山での活動の場合（表2）も、一般論とほぼ同じで、半分以上が関心があると答えている。参

加意向になると、やや積極性が薄れ、必要なら関わらざるを得ないと考える人が、1/3前後になる。関わりたくないと答えた人が、一般論の場合よりも若干増えている。

活動タイプごとの違いとしては、里山一般と同様に美化清掃への関心が、他の2つより明らかに高い。絵下山の美化清掃に、大いに関心があると答えた割合は約2割、多少あると答えた割合は約5割である。近隣住民にとって絵下山の環境として、ゴミ問題が広く意識されている。しかし、この場合も参加意向になると3者の違いはあまりなくなる。

次に、関心と参加意向について、クロス集計結果の概略を述べる。比較したのは、一般的な里山ボランティア活動の3タイプ間の関心・参加意向の関係、絵下山での活動の3タイプ間の関係、それと、3タイプごとにみた、一般的な活動と絵下山での活動との関係である。ここでは、次のような簡単な数字を計算した結果を述べる。

各設問は、例えば、里山管理に関心があるかという問いに対して、1大いにある、2多少ある、3あまりない、4まったくない、のように後ほど関心の程度が下がるように選択肢を並べてある。そこで、里山管理と美化清掃を比べる場合に、それぞれへの回答に際して、ランクを下げた人が、何割程度いるのかを計算した。美化清掃（一般）に大いに関心があると答えた人は39名いるが、その内の20名は里山管理については、大いに関心があるより関心程度の低い選択肢（多少ある、あまりない、まったくない）を選んでいる。多少あると答えた78名の内、27名が、あまりないか、まったくないを選んでいる。このようにランクを下げた人の数を総回答数で割ると、美化清掃と比べた場合に里山管理の関心が低くなる人の割合が得られる。これをいくつかの組み合わせについて計算して、それを集約すると次のような図式で示すことができる。ここで、「A>><B」は、Aで、ある選択肢を選んだ人の内20%以上の方がBでは（例えば関心の）ランクを下げ、Bで、ある選択肢を選んだ人の内10%以上の方がAではランクを下げた、という意味である。「<」は1つで10%分を示すものとする。

そのようにすると、

里山ボランティア活動一般：活動への関心
里山管理 <<美化清掃>> 環境教育 <里山管理

里山ボランティア活動一般：活動への参加意向
里山管理 <美化清掃>> 環境教育 <里山管理

絵下山での活動：活動への関心
里山管理 <<美化清掃>> 環境教育 <里山管理

絵下山での活動：活動への参加意向
里山管理 <美化清掃> 環境教育 <里山管理

里山管理：活動への関心 | 活動への参加意向
一般論 <絵下山 | 一般論 <絵下山

美化清掃：活動への関心 | 活動への参加意向
一般論 >> 絵下山 | 一般論 > 絵下山

環境教育：活動への関心 | 活動への参加意向
一般論 <絵下山 | 一般論 <絵下山

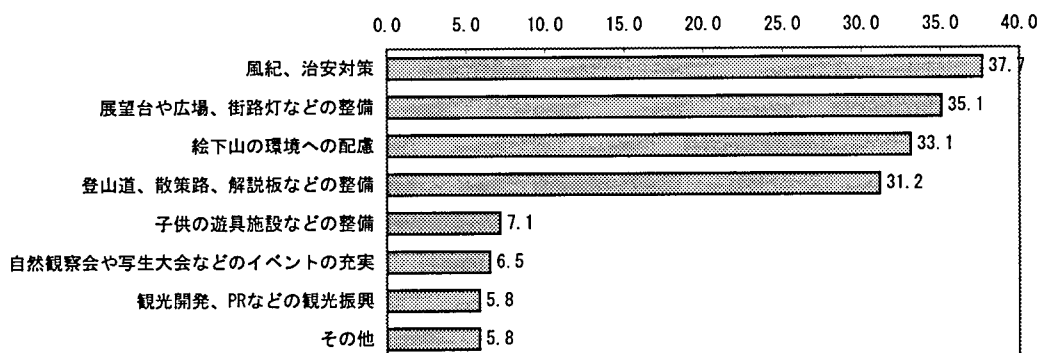


図3 絵下山山頂整備で重視すべきこと（周辺住民、%）

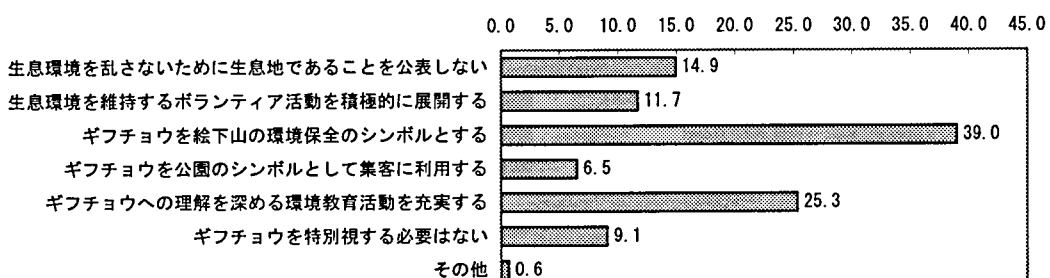


図4 公園整備にあたりギフチョウをどうとらえるか（周辺住民、%）

となる。3タイプの活動の内、美化清掃への関心・参加意向が相対的に高いことと、一般的な里山活動と比べて絵下山での活動になると関心や参加意向が相対的に低下することがわかる。絵下山近隣住民を対象としたアンケートで、絵下山での活動があまり評価されていないことは留意する必要がある。美化清掃の評価が高いことは、次の講座受講者アンケートの結果と異なっており興味深い。

(5) 絵下山の公園整備についての意見

まず、絵下山で里山公園整備が構想され市民参加が求められた場合、どの段階から関わりたいかという質問に対して、計画の立案段階や整備・建設段階と答えた人は少なく、あわせて2割にもならなかった。半分以上が、出来上がった公園で活動をする段階からを選んでいる。この設問への答え方も、早い段階からの参加を望む後述の講座受講者と大きく異なっている。

次に、絵下山山頂付近を新たに整備するとしたら何を重視すべきか(複数回答：図3)に対して、4つの項目に回答が集まり、残りの項目との差がついた。これらはいずれも1/3前後の率になったが、その中では風紀、治安対策の割合が高かった。それに次いで、展望台や広場、街路灯などの整備が高い数字になっており、近隣住民は、絵下山において自然環境よりは人工的な環境の方を重視する傾向がある。講座受講者では、絵下山の環境への配慮が突出して高くなっており、意識の差が明確である。

公園整備にあたりギフチョウの生息地であることをどう考えたらよいかという問い(複数回答：図4)では、ギフチョウを絵下山の環境保全のシ

ンボルとして里山環境保全に努める、の割合が約4割を占めた。次いでギフチョウへの理解を深める環境教育活動を充実する、が約1/4の支持を得た。ギフチョウを特別視する必要はない、も約1割を占めた。

絵下山の電波塔建設や公園整備に関する自由記述欄には多数の意見が寄せられた。電波塔や公園整備等の人工的改変に反対する声もあるが、目立つものは、風紀問題や、交通安全問題(暴走族、工事車両、ドライブ客など)、ゴミ問題など、自然環境というより社会環境への意見である。また、公園としての絵下山が、きれいでないとか、憩えないとかの、実際によく訪れている人からの苦言も呈されている。このあたりに、先に述べたような、一般論としての里山への関心より、地元絵下山への関心が低くなる一因があると思える。近隣住民にとっての絵下山の魅力、望ましい環境とは何か、を考える必要がある。

3. 森林ボランティア養成講座受講者アンケート調査の結果

(1) 対象者の属性

アンケートの対象者は、1996年度から2004年度までの広島市の森林ボランティア養成講座の受講者である。回収率は50%近くに達し、里山への関心の高さをうかがうことができる。回答者は、男性が3/4、女性が1/4で、男性の割合が高い。年齢的には、40~60歳がほぼ半分、60歳以上が約4割で、両方で回答者の大部分を占める。里山活動(里山管理)に関心を持ち、活動に参加する中心は、中高年の男性といえる。

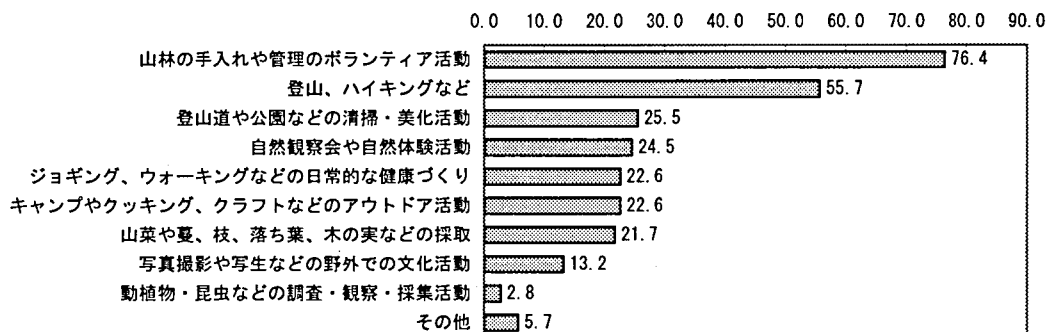


図5 広島市周辺の山林で行っている活動(講座受講者、複数回答、%)

(2) 里山との関わりの程度

回答者が、広島市周辺の山林で行っている活動(複数回答：図5)としてもっとも多かったのが、山林の手入れや管理のボランティア活動(76.4%)で、これは対象者をボランティア講座受講者としているので当然の結果ではある。ただ、一般的にはボランティア講座を受けても、そのまま活動につながるわけではないことを考えると、この講座は、ボランティアの育成を図るという目的を相当に果たしていると評価できる。一つには、講座修了者の受け皿となる市民組織があり、活動の場があるということが大きい。ボランティア活動に次いで多かったのは、登山、ハイキングで半分以上の回答者が選択していた。日頃から山に親しんでいることから、ボランティアへの参加意識が育まれていったということであろう。この他、公園などでの美化清掃活動、自然観察会や自然体験活動、アウトドア活動、健康づくりなどが2割以上になった。

里山管理の活動のみならず、美化清掃活動や環境教育活動にも積極的に参加しているが、具体的にどのような活動をしているのかを自由回答形式でたずねた。76.4%の回答者が里山管理活動に関わっていると答えるだけあって、間伐や枝打ち、下草刈りなどの活動に従事しているとの答えが多く、その受け皿として市民組織の「もりメイト倶楽部 Hiroshima」が機能している。その他、「あ〜と村」や緑化センターなど、活動のフィールドは広がっている。

このような活動も含め、山に入る頻度としては、月に数回程度がもっとも多く、39.6%を占める。年に数回、月に1度位をあわせると全体の90%以上となり、山に出かける頻度がとても高い。選択肢が異なるが、先の絵下山住民アンケートと比べると山と関わる程度の差は顕著である。

また、里山管理や美化清掃、環境教育活動などのボランティア活動に関わる頻度をみても、山に入る頻度は高く、年に数回から月に数回までが全体の約8割を占める。活動に関わるきっかけとしては、講座に参加したことが、54.7%と多く、広報などで知った35.8%、問題意識があって自主的

にはじめてが23.6%、友人・知人に誘われてが10.4%であった。

(3) 里山ボランティア活動への関心と参加意向

ここでも絵下山周辺住民へのアンケートと同様、里山ボランティア活動への関心と参加意向を、一般的な活動と絵下山での活動に分けて尋ねた。活動については、間伐や下草刈りなどの山の手入れをする活動(里山管理)と公園のゴミ清掃などの美化活動(美化清掃)、自然観察会等の環境教育活動(環境教育)の3タイプに分けてある。

里山一般での活動(表3)には、ほとんどの人が関心あると答え、しかも、大いにあるが、多少あるを大きく上回っている。なかでも里山管理への関心は強く、約7割が大いに関心あると答えている。それと比べると環境教育への関心はあまりない割合が15.1%で関心は薄い。参加意向については、ぜひ関わりたいという積極的な回答の割合は高い(周辺住民と比べると顕著である)が、それでも機会があれば関わりたいという、一歩引いたスタンスが6割弱を占める。関わりたくないと答える人は少ない。活動タイプごとの違いとして、里山管理の評価が高いのは当然といえるが、周辺住民の際に確認されたような美化清掃への関心の高さはここではない。むしろ、参加意向において、美化清掃は必要なら関わらざるを得ないの割合が、他の2つより高くなっており、積極的には関わりたくない人が増える。

絵下山での活動(表4)になると、一般論の場合と傾向は似ているものの、明らかに消極的になる。その度合いは絵下山周辺住民よりも著しい。もっとも、関心の高さや参加意向の強さは、講座受講者の方が絵下山周辺住民の数字を大幅に上回っている。また、活動タイプごとの差は、一般論としてより絵下山の話になると縮まる。ただし、美化清掃への関心や参加意向が、周辺住民の場合と逆に、講座受講者の場合には3タイプの中ではもっとも低い。

次に、周辺住民の場合と同様に関心と参加意向について、タイプ間の比較、並びに一般論と絵下山の比較を行った。前章で説明した方法で、各項

表3 里山ボランティア活動への関心と参加意向（講座受講者・里山一般）

単位%

		里山管理	美化清掃	環境教育
関心の有無	おおいにある	70.8	51.9	46.2
	多少ある	25.5	40.6	36.8
	あまりない	2.8	6.6	15.1
	まったくない	0.0	0.9	0.0
	無回答	0.9	0.9	1.9
参加意志	ぜひ関わりたい	35.8	23.6	22.6
	機会があれば関わりたい	54.7	55.7	57.5
	必要なら関わらざるを得ない	7.5	18.9	12.3
	関わりたくない	1.9	0.0	5.7
	無回答	0.9	1.9	1.9

表4 里山ボランティア活動への関心と参加意向（講座受講者・絵下山）

単位%

		里山管理	美化清掃	環境教育
関心の有無	おおいにある	35.8	29.2	23.6
	多少ある	43.4	42.5	45.3
	あまりない	17.0	24.5	26.4
	まったくない	0.9	1.9	0.9
	無回答	2.8	2.8	4.7
参加意志	ぜひ関わりたい	19.8	11.3	10.4
	機会があれば関わりたい	53.8	51.9	55.7
	必要なら関わらざるを得ない	16.0	24.5	18.9
	関わりたくない	6.6	7.5	9.4
	無回答	3.8	4.7	5.7

日間の優先度を模式化して示すと次のようになる。先と同様、「<」は1つで10%分を示す。

美化清掃：活動への関心 | 活動への参加意向
一般論>>> 絵下山 | 一般論>>> 絵下山

里山ボランティア活動一般：活動への関心
里山管理>> 美化清掃>> 環境教育 <<<里山管理

環境教育：活動への関心 | 活動への参加意向
一般論>>> 絵下山 | 一般論>>>>>> 絵下山

里山ボランティア活動一般：活動への参加意向
里山管理>> 美化清掃 <<環境教育 <<<里山管理

絵下山での活動：活動への関心
里山管理>> 美化清掃>> 環境教育 <<里山管理

絵下山での活動：活動への参加意向
里山管理>> 美化清掃 <環境教育 <<里山管理

里山管理：活動への関心 | 活動への参加意向
一般論>>>>> 絵下山 | 一般論>>>> 絵下山

となる。3タイプの活動の内、里山管理への関心・参加意向の評価がかなり高いこと、一般的な里山活動と絵下山での活動とを比べると著しく絵下山の評価が下がることが特記できる。一般論と比べて絵下山の評価は下がるが、関心や参加意向はそれでも高い数字になっている。ただ、里山活動に関心のある人たちにとって、絵下山の魅力をどのように創出していくのかは大きな課題といえよう。周辺住民のアンケートでも、絵下山の評価が一般論より低かったことも加味すれば、広島市民にとって絵下山は特別な場所としては認識されていないということでもある。

(4) 絵下山の公園整備についての意見

まず、絵下山で里山公園整備が構想され市民参加が求められた場合、どの段階から関わりたいかという問いに対して、39.6%の人が、公園の整備・建設段階と答えており、構想・計画の立案段階がそれに次いで18.9%となった。出来上がった公園での山林管理や環境教育の割合も高いが、関わるなら整備前から関わりたいという意志が表明されている。この点は、公園が出来上がってから関わりたいという人が半分以上であった周辺住民のアンケート結果と対照的である。周辺住民の場合には、公園完成前から関わりたいという人は2割、講座受講者の1/3に満たなかった。

次に、絵下山山頂付近を新たに整備するとしたら何を重視すべきか(複数回答：図6)に対して、もっとも多かったのは、絵下山の環境への配慮で73.6%(周辺住民は33.1%)と際だって高く、周辺住民の場合とは異なっている。自由回答でも、

絵下山の環境破壊をこれ以上すべきでないという主張が目立つ。一般論としても山林の開発は最小限に押さえるべきという意見もあれば、絵下山の現状を知った上でこれ以上の開発は止めるべきとの意見も寄せられている。

これに次ぐ項目は、登山道・散策路・開設板などの整備、38.7%(周辺住民31.2%)で、周辺住民の場合に高かった風紀・治安対策13.2%(周辺住民37.7%)と展望台や広場などの整備9.4%(周辺住民35.1%)は特に高い項目ではなくなっている。周辺住民は、生活環境を重視するのに対して、講座受講者は自然環境を重視している。

公園整備にあたりギフチョウの生息地であることをどう考えたらよいかという問い(複数回答：図7)では、ギフチョウを絵下山の環境保全のシンボルとして里山環境保全に努める、の割合が56.6%(周辺住民39.0%)となった。次いで、ギフチョウへの理解を深める環境教育活動の充実

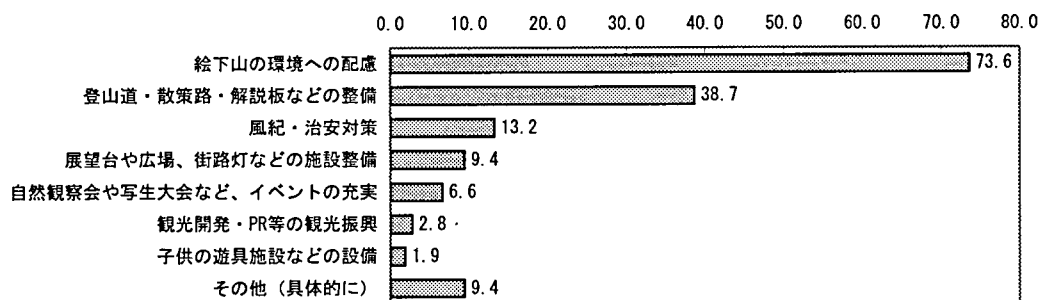


図6 絵下山山頂整備で重視すべきこと(講座受講者、%)

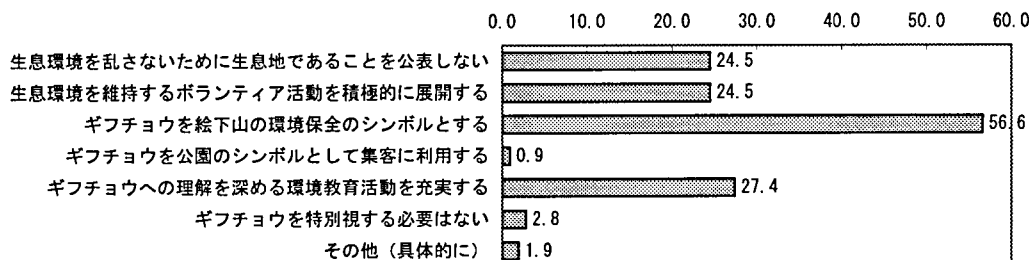


図7 公園整備にあたりギフチョウをどうとらえるか(講座受講者、%)

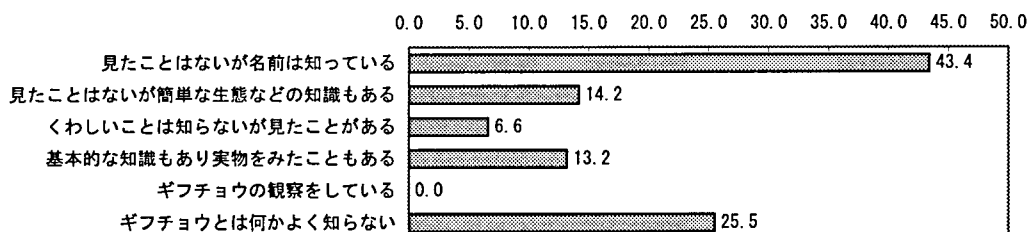


図8 ギフチョウの認知度(講座受講者、%)

27.4%（周辺住民25.3%）、生息環境維持のためにボランティアを積極活用する24.5%（周辺住民11.7%）、保護のために公園とギフチョウを積極的に結びつけない24.5%（周辺住民14.9%）となった。

ちなみに、回答者のギフチョウ認知度についてもたずねたところ（図8）、周辺住民よりはよく知られており、回答者の3/4は、ギフチョウを知っていた（周辺住民では知らない人が56.5%）。ただし、名前を知っている程度の割合が高い（43.4%）のは、周辺住民の場合と同様である。実物を見たことがある人は、2割程度であった。

自由記述欄には、周辺住民の場合以上に多くの意見が寄せられた。日頃、里山に関して意見をいう場が限られるからではないかと思えるほど、ほぼすべての回答者から、苦言・応援その他の書き込みをいただいた。一言でいえば、自然が失われていることへの憤懣が伝わってくる。中には絵下山の現状を知る人からの意見もあり、それらからは絵下山の現在の環境があまりよくないとの指摘が繰り返されている。先の集計結果にも示されたように、絵下山が自然環境の面で特別な場所としては認識されないのは、環境の現状にも問題があるといえよう。

4. 市民参加型里山公園の可能性

(1) 絵下山の自然保護と環境整備についての市民意識

1) 絵下山の認識

絵下山周辺住民と森林ボランティア講座受講者を対象としたアンケートを行ったが、そこから推測される絵下山のイメージとして、その存在は知られているし、登ったことのある人がそれなりにいるが、人為的な影響（開発や利用者のマナーなど）によって環境は損なわれているというものではないか。

周辺住民では、絵下山の魅力として8割以上の人が山頂からの展望の良さをあげ、山頂整備に期待するものとして風紀・治安対策や展望台や広場等の整備をあげている。一方、ゴミが多いことや

交通安全に問題があることなどを指摘する。都市公園的な性格や生活環境の一部としての側面が、周辺住民にとっての絵下山の現在の価値評価につながっているといえる。絵下山での里山活動については、機会があればという限定つきながら、4割前後の人が関わりたいと答えている。

また、里山ボランティア活動に関心をもつ人たちにとって、現状では、絵下山は広島近郊において特に注目を払う山とはいえない、言い換えれば、「絵下山だからこそ」力を入れて環境を良くしようということにつながらない場所になっている。しかし、彼/彼女らの実際の活動場所をみる限り、その環境が他と比べてすぐれているのかといえば、そういうわけでもなく、むしろ日常的に活動できる場所であるからこそ、その場所にこだわる（そこが大事な場所になった）と考えられ、その意味では名の知れた絵下山であれば、そこが彼/彼女らの定期的な活動場所の一つになったとき、特別な意味を持つ場所に絵下山が変わる可能性がある。実際、数字上のことだとはいえ、73.6%という高い割合の人が絵下山での里山管理活動に、63.2%が美化清掃活動に、66.1%の人が環境教育活動に、それぞれ参加してみたいと答えているのである。

2) ギフチョウの認識

ギフチョウについて、周辺住民の56.5%、講座受講者の25.5%がよく知らないと答えており、名前は知っていると答えた割合が、前者で32.5%、後者で43.4%となっている。実物を見たことがある人は、周辺住民では9.0%、講座受講者ではこれが増えて19.8%である。実際のところ、知らない人や、見たことのない人が多く、アンケートで、自然観察会などギフチョウへの理解を深める環境教育活動を充実すべき、と答えた人が、周辺住民25.3%、講座受講者27.4%と高い数字になっている。また、今後の公園整備にあたり、ギフチョウを公園のシンボルとして里山環境保全に努める、を支持するものの割合（前者39.0、後者56.6%）が、ギフチョウの生息地であることのとらえ方として、もっとも高くなっている。ギフチョウは今ひとつ馴染みの薄い蝶だが、それについて自ら学

び、かつ他者に伝える活動の必要性が認識され、ギフチョウをシンボルとして里山環境保全を進めるべきだという意識を確認することができる。

3) 絵下山公園整備についての市民意識

アンケートの結果に限定すると、公園整備について大まかに3つの方向が考えられる。一つは、周辺住民の意見に多くみられるような、風紀・安全・美化に十分な配慮がなされた展望公園を整備すること、もう一つは、いずれの場合にも同じようにみられた、自然環境を重視した公園（里山公園的なもの）を整備すること、それともう一つは講座受講者の中に多かった、最低限しか手を加えないこと（公園をつくるという発想を捨てること）である。絵下山の山頂部という世の中に1箇所しかない、しかもそれほど広いとはいえない空間に対して、ごく限られた人からの意見としても、これだけの差が認められる。山頂をどう整備するのかについては、いきなり原案ありき、というのではなく、意見の異なる人を一つのテーブルに集めて、様々な意見を出し合った上で、方針を創り出していくことが大切ではないか。その作業が、絵下山山頂での出来事が他人事ではなく、自分事になる人を増やすために不可欠であろう。具体的には、例えば、絵下山山頂整備に係る市民協議会のようなもの（自然再生法の自然再生協議会もその一つ）を考えてもよい。今は絵下山への関心やギフチョウの認知度が必ずしも高くないので、早い段階から市民・住民を巻き込んでいくことは大切である。

(2) 広島市のイニシアチブとキーワードとしての「自然再生」

絵下山での里山活動への関心や参加意向は、数字上高いが、一般的な里山活動と比べて絵下山での活動になると支持度合いが下がり、参加したいという答えの中では機会があれば参加したいという、受け身的な姿勢が示される。また、自由回答欄でのコメントが現状批判的なものが多く、新たな提案は少ないという現状を踏まえれば、今後、市民・住民側から絵下山をどうしてほしいという要望や、市民主導でまともって絵下山で活動を起こすということは起きそうもない。

通常であれば、そのような場所は、それこそ最小限の管理のみを行い、自然にまかせるのがよいのだろうが、絵下山が他の場所と違うのは、課題の設定が、自然の山をこれからどう整備するかではなく、すでにある大きな人工物を撤去した跡地をどうするのか、となっていることである。時が来るまで放置しておいてよい場所ではない。

そうだとすると、絵下山の整備に際して、はじめは行政のイニシアチブが必要ではないか。しかもその際に、「電波塔の跡地再生」と「ギフチョウとの共存」の2つのキーワードを前面に出して、自然再生事業などインパクトがあり、全国的に制度化されているものを利用していくことが戦略として考えられる。自然環境面での絵下山のイメージが薄く、変ないい方をすれば「絵下山なら是非」というより「絵下山かあ」というような受け取られ方をしている現状では、事業や活動の意義を名目的にでもつくりだすことには意義がある。多くの自然再生事業の先進地は、その場所自体のネームバリューが高く、その場所であるからこそその吸引力が働き、すでに活動が育ちつつあったところに、事業が後から乗った面もある。しかし、そのような場所には限りがあり、今後、自然再生の動きを広げていくには、これまでとは逆に言葉として定着しつつある自然再生を利用して、その場所の吸引力を創り出していく発想もあってよい。絵下山の場合、電波塔というランドマークとして目立った建造物があり、絵下山は知らなくても電波塔を見ている市民は多いこと、しかも、それは全国一律の地上波デジタル放送という画期的なイベントに関係するものであり、各地で電波塔をめぐる議論がなされているという意味で今日的な話題性があること、などから、その跡地の自然を再生するという名目は大義名分がたてやすい。また、自然再生をうたう際に、シンボルとしてギフチョウの存在が生きてくる。アンケートでもギフチョウの活かし方は、里山環境保全を進めるためのシンボルとすることが支持されており、観光開発などより環境保全とのつながりの方が広く支持されるであろう。加えて、ギフチョウの認知度が高くないので、ギフチョウの保護を主目的にす

るより自然再生の文脈の中にギフチョウとの再生を取り込んでいく方が市民の理解が得られやすい。

先述のように、山頂という限られた場所をどうしたらいいのかという考え方にかかなりの幅があり、しかも周辺住民と講座受講者のように属性によって、考え方が異なる傾向が認められるので、この場所をどうするのかという議論を交わし、この場所への関心や将来的なこの山での活動の芽を育てていくためには、制度的に裏付けられた協議の場を設けて、さまざまな意見を出し合う中から方向性を探っていくことは対応策の一つといえる。自然再生協議会などはそのひとつの事例になるのではないだろうか。講座受講者アンケートにみられるように、里山環境に関心を持つ人は、環境整備にあたって早い段階からの市民参加を求めており、そのようなニーズに応えるためにも、そのような場を設ける意味があろう。

付 記

本調査は、平成16年度後期広島大学特定課題プロジェクト「絵下山公園をモデルにした新しい都市公園づくり」(研究代表者：渡邊一雄)の一部として行った。また、本稿を『日本研究』特集号3に投稿することにしたのは、絵下山の環境の再生、景観の再生というテーマが、特集の「瀬戸内の傾斜地域、その暮らしと景観」という主題に合致していると判断し、これについて検討する材料となると考えたからである。

調査にあたっては、絵下山周辺の団地にお住まいの方々、並びに広島市の森林ボランティア養成講座受講者の皆さまには、アンケートにお答えいただき、貴重なご意見をいただいたこと大変感謝しています。また、広島市緑化推進部並びに農林業振興センター森林整備課には便宜を図っていただきました。関係者の皆さまに、厚く御礼申し上げます。なお、アンケートの配布やデータの集計作業等において、広島大学社会科学部研究科の金光由江、光武昌作、総合科学部の上岡紗野香、萩森優の協力を得ました。